

2011年度 インターゼミ アジアダイナミズム班 最終発表
2011.12.10

日中韓の「偉人」から何を学ぶか

西村 遼 宮崎 真
加藤駿介 吉田敏子

目次

- ▶ 1 概論 ～アジアグループ全体の研究目的から～
- ▶ 2 これまでの研究の流れ ① ②
- ▶ 3 研究の必要性の捉え方
- ▶ 4 結論
- ▶ 5 伊藤博文とは
- ▶ 6 安重根を学んで
- ▶ 7 もし孫文が今に生きていたら ～孫文の研究を通じて～
- ▶ 8 孫文と日本との関係を通して得られた教訓
- ▶ 9 今後の全体的な課題
- ▶ 参考文献

概論 ～アジアグループ全体の研究目的から～

研究の目的

日中韓の‘偉人’から、過去から現在、未来へ連なる課題の解決への糸口を学ぶこと

研究目的の理由

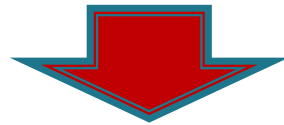
日中韓の「偉人」調査によって生じた様々な問いから現在、未来に連なる手がかりが得られたから。

アジアダイナミズムについて

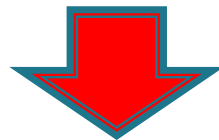
アジアダイナミズムが世界史の一部を作っているだけでなく、歴史がアジアダイナミズムを作り出していることがわかった。

これまでの研究活動の流れ 1

歴史的人物を年表にして候補選定



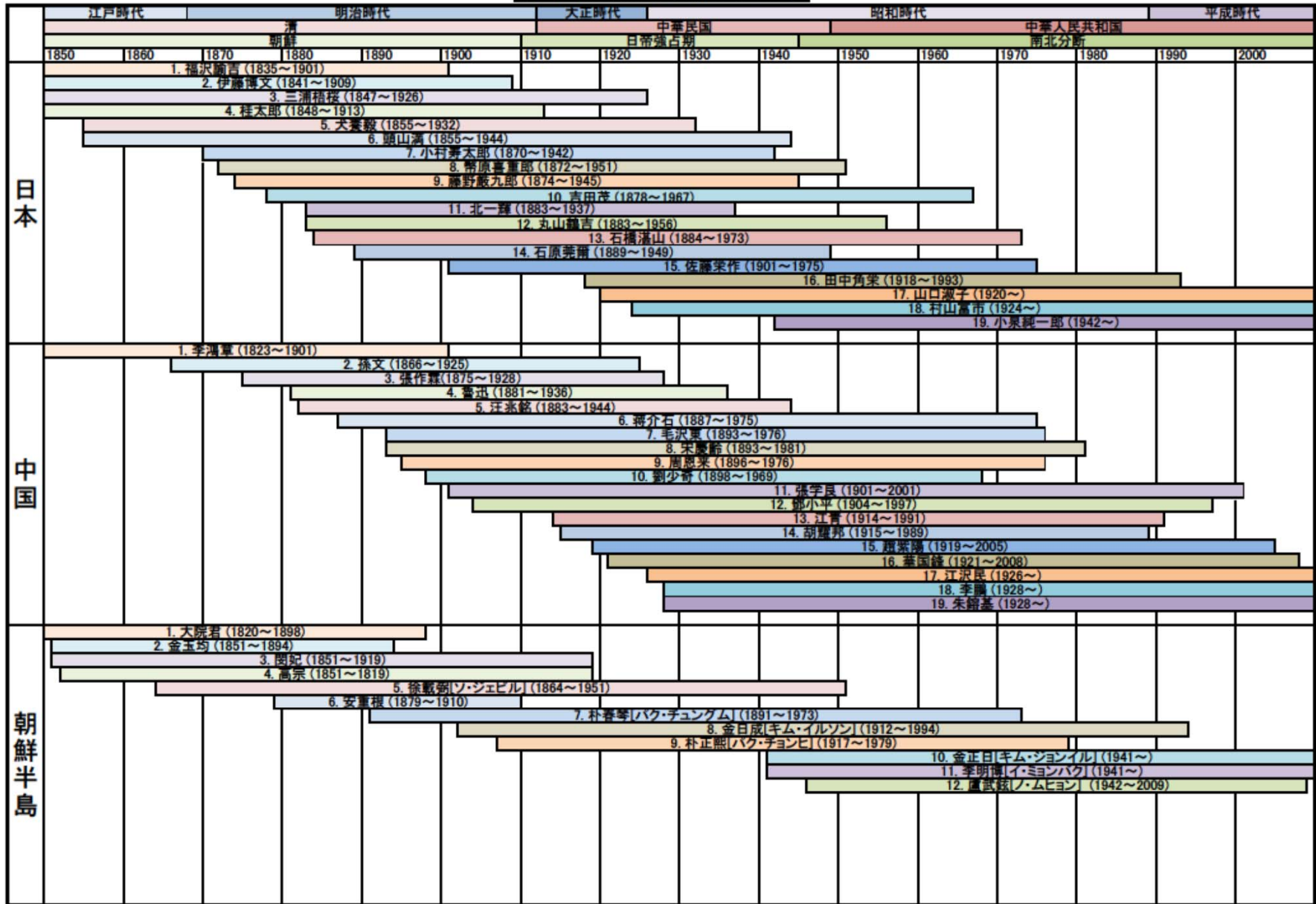
日中韓の5人の‘偉人’に絞り込み



日中韓の3人の‘偉人’に絞り込み

主なフィールドワーク先は、東京国立博物館
主催「孫文と梅屋庄吉～100年前の中国と日
本～」、神奈川大学主催「辛亥革命とアジアシ
ンポジウム」、孫文記念館

日中韓150年人物年表史



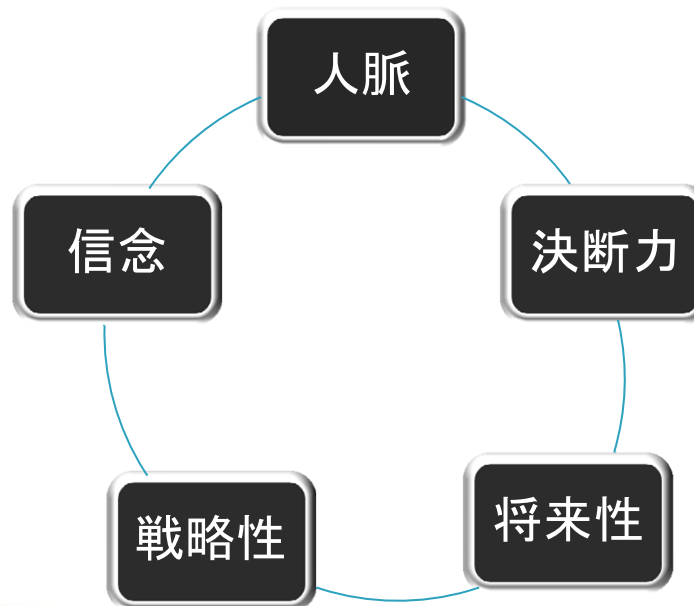
研究の流れ 2

歴史的人物の確定

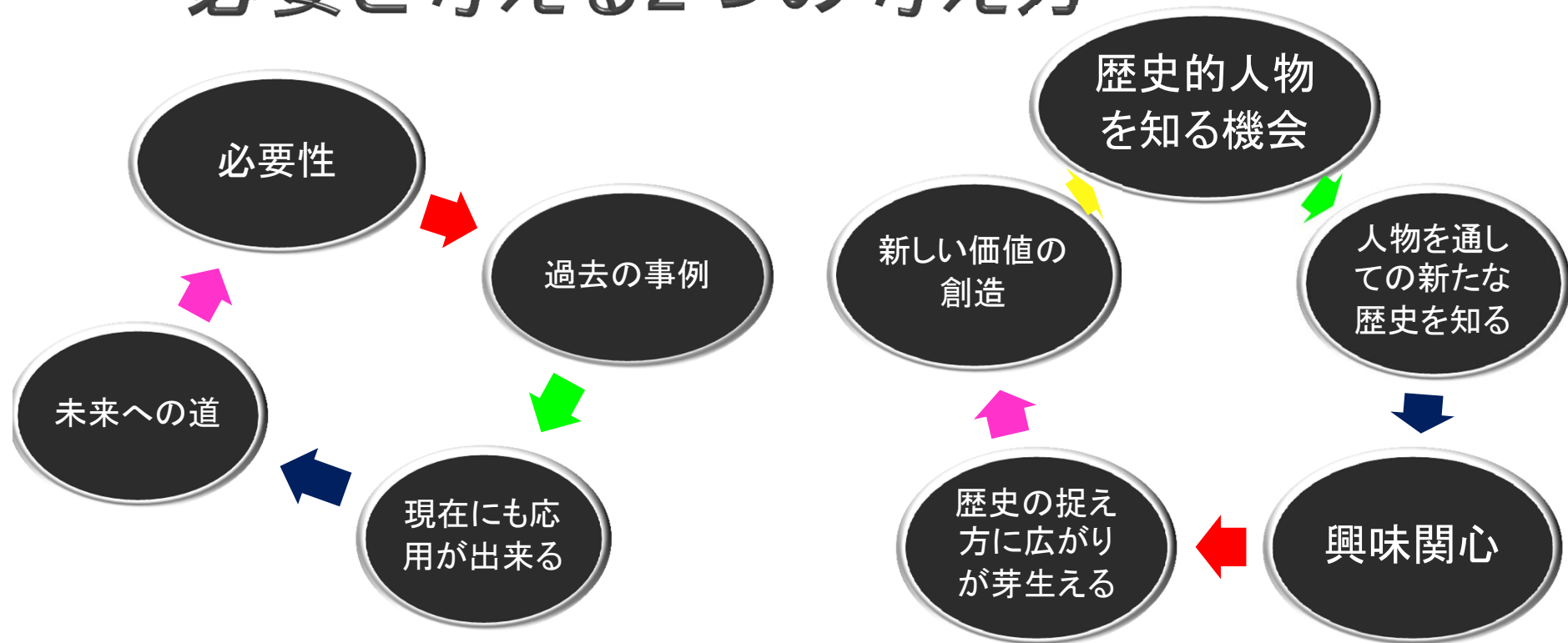
伊藤博文

孫文

安重根



3 研究の必要性の捉え方 必要と考える2つの考え方



- ・循環型にすることにより、必要性の重要性が増す。
- ・仕組みを作る事が大切。

日中韓150年史年表

	日本	中国	朝鮮半島
江戸時代	1854 アメリカと和親条約を結び開港	1850 ~64 太平天国の乱	
	1867 王政復古 1868 明治維新	1856 ~60 アロー号事件 1858 ロシアとアイグン条約締結 1860 英仏連合軍、北京占領 1862 洋務運動開始	1862 晋州民乱 1863 高宗即位、興宣大院君政權掌握 1964 東学教祖崔濟愚、大邱輪音頒布
朝鮮	1875 ロシアとの間に千島・樺太交換条約締結	1880 李鴻章、海軍創立	1879 日本と江華島条約締結
	1881 自由党結党	1884 ~85 清仏戦争	1882 壬午軍乱 1883 対極旗を国旗に制定
明治時代	1885 内閣責任制政治制度成立 1889 大日本帝国憲法公布 1900 第1回帝国議院開院	1885 イギリス艦隊、巨文島不法占拠 (~1887)	1885 甲申政変 1895 乙未事変 1897 国号を大韓帝国とする
	1894 日清戦争勃発 1895 下関条約で日清戦争終結、露・仏・独の三国干渉	1898 ヨーロッパ各国に香港等租借地許可 1898 戊戌政変失敗 1899 ~1901 義和団事件	1894 甲申政変 1895 乙未事変 1897 国号を大韓帝国とする
大正時代	1904 日露戦争勃発 1905 ポーツマス条約で日露戦争終結	1905 孫文、日本の東京で中国革命同盟会結成	1905 韓・日間乙巳条約調印 1905 京釜線鉄道開通
	1909 伊藤博文、ハルビンで安重根により暗殺	1911 武昌蜂起と辛亥革命 1913 孫文、日本に亡命 1913 ~16袁世凱、大統領に就任	1910 韓日併合条約調印 1911 105人事件 1913 安昌浩、アメリカで興士団創立
日帝強占期	1914 ドイツに戦線布告。第1次世界大戦勃発	1915 日本、中国に対華 21条要求提出	1919 三・一運動。大韓民国臨時政府
	1918 シベリアに出兵 1919 普通選挙権運動起きる	1919 5・4運動勃発。中華革命党、中国国民党に改称	1920 洪範圖等、鳳梧洞の戦闘で勝利 1921 金佐鎮等、青山里で大勝
中華民國	1923 関東段震災	1924 第1次国共合作	

昭和時代	1926 蒋介石、北伐開始 1927 毛沢東、井崗山に革命根據地樹立	1926 6・10歳運動 1929 光州学生運動 1932 李承昌義挙、尹奉吉義挙
	1931 満州事変起きる 1933 国際連盟脱退	1934 ~36中国共産党の大長征 1936 西安事件 1937 中日戦争勃発。第1次国共合作
中華人民共和國	1936 2・26事件 1937 日中戦争勃発 1938 国家総動員法制定 1940 日独伊三国軍事同盟条約調印 1941 真珠湾攻撃、太平洋戦争勃発 1945 広島・長崎に原子爆弾投下、無条件降伏 1946 ~48 極東軍事裁判	1940 臨時政府、中国で光復軍創設 1945 日本敗戦、大韓民国解放 1946 米ソ共同委員会、信託統治決定 1948 38度線以南に大韓民国、以北に朝鮮民主主義人民共和国樹立 1950 朝鮮戦争
	1951 日米安全保障条約調印 1956 国際連合に加入	1949 中華人民共和国樹立 1954 ソ連と共同で「平和五原則」発表
南北分断	1965 日韓基本条約調印 1972 日・中国交正常化	1960 4月革命。第2共和国樹立 1961 朴正熙、5・16軍事クーデター起こし政権掌握 1966 文化大革命開始 1968 鄧小平失脚 1971 国際連合加入。台湾、国連脱退 1971 南北赤十字会談 1972 韓国に維新体制成立
	1979 アメリカと国交正常化 1984 資本主義経済宣言 1989 天安門事件	1979 朴正熙暗殺事件 1980 光州民主化運動 1981 第5共和国成立 1987 6月抗争。大統領直選制改憲 1993 金泳三政権成立 1997 IMF危機 1998 金大中政権成立 2000 6・15共同宣言
平成時代	2001 .4 小泉政権成立 2002 .9 小泉総理、平壤で金正日と初めての首脳会談	2000 台湾、最初の与野党政権交代 2001 .11 WTO加入 2002 韓日共同ワールドカップ開催 2003 盧武鉉政権成立

出展: 韓国教員大学歴史教育科、吉田光男「韓国歴史地図」

結論 【アジアグループ全体として】

- ▶ 日中韓それぞれの国を背負った‘三人の偉人’の視点を通して、現在と未来に応用できることを学ぶことができた。
- ▶ 3人から学んだことには類似する点もあれば、異なる点もあった。
- ▶ 類似点は、「自己の理想」を実現するためには、**他者と意見や考え方を相互に分ち合うこと。**また、**困難や苦難を乗り越える時に、自らが築きあげた人間関係が大きな力になるということ。**



伊藤博文とは

西村 遼

伊藤博文の人物思想

状況

- ・ 日露戦争開戦直前の1904年1月～日露宣戦布告(2月10日)まで開戦か戦争回避かをめぐり政府内では激論が度々交わされていた。
- ・ そのなかで、伊藤は断じて日露協商の希望を捨てていなかった。背景の一つとして、戦時財政の見通しが立っていなかったことがある。

問

- ・ 伊藤博文は開戦をなぜ固辞したのか?
- ・ 伊藤博文は誰よりも状況把握に長けていたのではなかろうか?
- ・ 伊藤博文の考えを理解した人物は?

方向性

- ・ 日露戦争から伊藤博文の思想を伺い、「平和主義者」という一面を垣間見る事ができた。
- ・ 伊藤博文の「価値観」を掘り下げる事ができた。
- ・ 伊藤は自己過信することなく、現状認識を徹底的に行った。

伊藤博文の人物思想

方向性

- ・日露戦争から伊藤博文の思想を伺い、「平和主義者」という一面を垣間見る事ができた。
- ・伊藤博文の「価値観」を掘り下げる事ができた。
- ・伊藤は自己過信することなく、現状認識を徹底的に行った。

方向性 の深化

- ・伊藤博文は人的ネットワークを使い、「戦略的分析家」
- ・日本国がアジアの牽引役となる事に尽力



安重根を学んで 加藤駿介

安重根を学んで

安重根を学んで

- ▶ 安重根は日本を恨んでいたのではなく、それにあたふたする母国の対応に憤りを感じていた
- ▶ ただ、彼が母国に対する愛国心は今の人達も見習うべきだ。

今後の課題

- ▶ 今後の課題として、彼とは直接の関係性はないが金玉均を調べていけば今回見つけられなかった新たな真実が発見できると考えた。



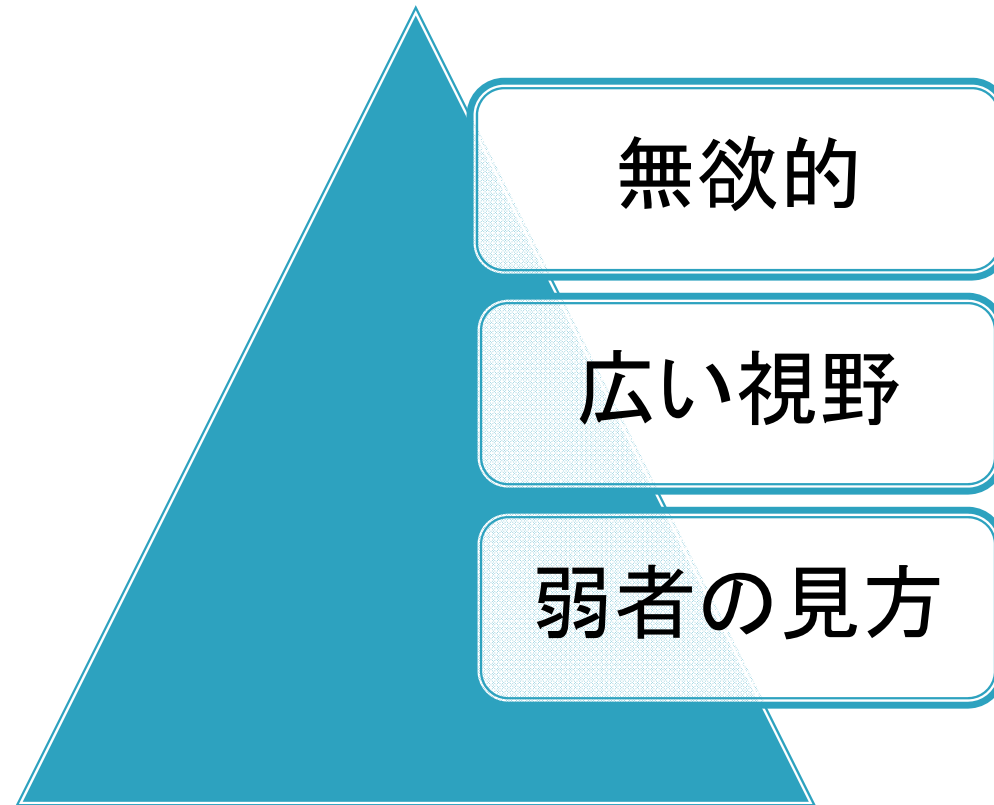


もし孫文が今に 生きていたら

～孫文の研究を通じて～

吉田敏子

孫文とは、どんな人物か



「中国と台湾を作った人」

孫文を研究して、結論

- ▶ 国民党こそ中国を作った政党だ。
- ▶ 日中戦争がなければ、共産党の勢力は今ほど大きくならなかったはず。
- ▶ 今の中国に必要なのは、決断力、実行力、そして百年先まで見えるリーダだ。
- ▶ もし孫文が今にいたら、台湾の国民党を認めるだろう。

孫文と日本との関係を通して得られた 歴史的教訓

宮崎 真

本章の目的と意義

本章の目的

孫文と日本との関係史を通して様々な教訓を再び紐解くことである。

本研究を通して

研究を通して、今後の日本と世界とのあり方についての示唆が得られた。

様々な歴史から何が学べるか、何を検証できるかを問いかける機会になった。

結論 孫文と日本との関係からの歴史的教訓

主な5つの教訓

- 1 友情の拡大と深化
- 2 時代や状況に対する認識を深めること
- 3 共通善への問いかけ
- 4 海外から日本へ来る動機
- 5 人間関係が大きな力になる

友情の拡大と深化 1

～孫文と日本との関係からの教訓として～

孫文と日本との関係が多様であったが、限定的であった。

多様で、限定的であったとは？

多様であったとは？

孫文は、生涯で16回日本に訪問し、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸、福岡、長崎、熊本における政治家や知識人、自由民権運動家、経済人、地主などと多様ではある。

限定的だったとは？

一方で孫文は、その他の地域や、経済的に豊かではない人々、日本政府の要人や政治家との関わりは限られていた。

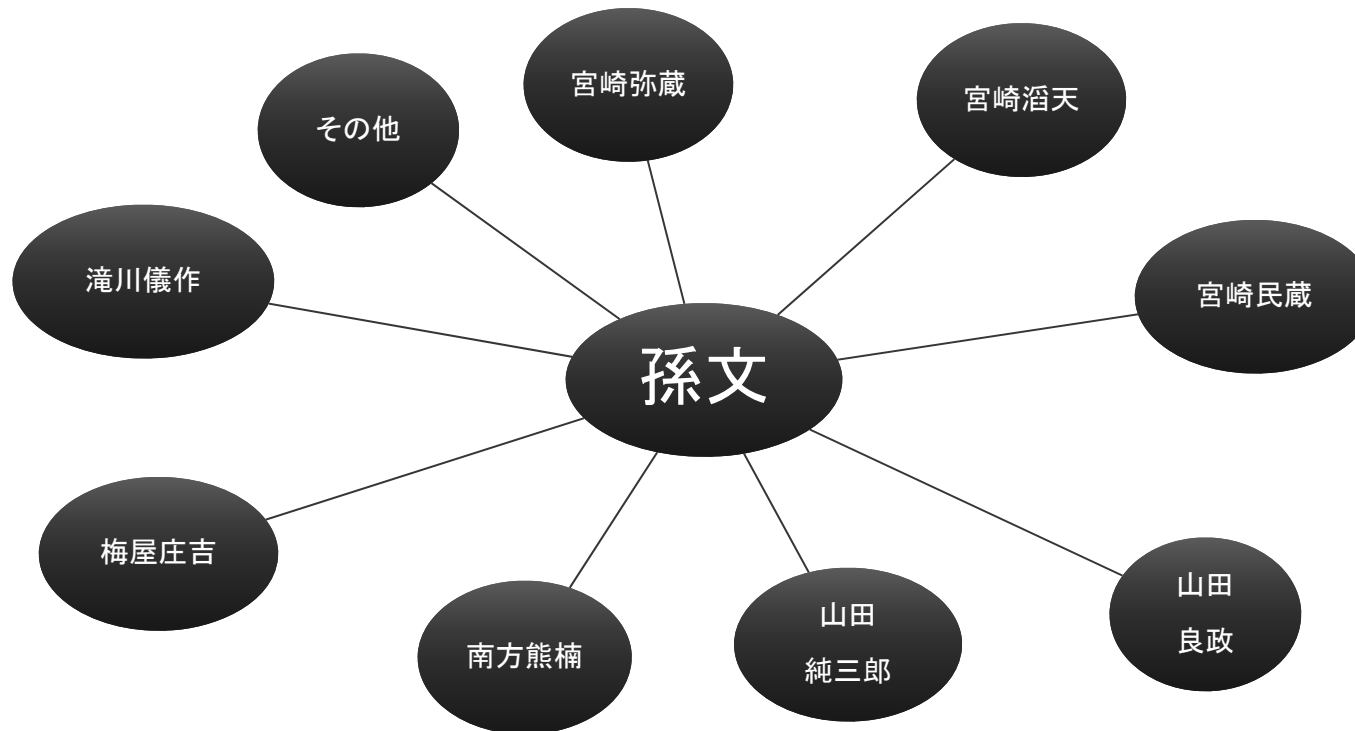
つまり、必ずしも友情で結ばれたものではなかった。

したがって、当時、中国人としてのアジアの連帯への願いは広く日本に伝わっていなかった。この教訓から、友情を拡げることということが大切だとわかる。

友情の拡大と深化 2 ～孫文と日本との関係からの教訓として～

孫文と日本との関係を追うと、友情の深さに引き寄せられる。

孫文と日本の友人関係図



孫文にとって、この友情は、対話を通して深められた友情である。

海外から日本へ来る理由 ～孫文と日本との関係からの教訓として～

日本が観光立国として移民国家として発展するには？

何故、孫文は日本に来たのか？

孫文は、亡命せざるを得なかっただけでなく、東アジアではじめて近代化された日本に興味を抱き、革命の協力者が得られると思ったからである。

海外の人が日本に来る動機

観光客として...

移民として

国民の同意

多重国籍の許可

権利と義務に関する法の確立と修正

食料など日常必需品の値下げなど

映画・シンポジウムの感想

- ▶ ジャッキーチェン主演 映画「1911(辛亥革命)」
 - ・孫文は、人と人との関係を構築し、黄興は、革命を起こす為、第一線において活躍した。また、青年たちが中心となり国の変革に力を注いだ。
- ▶ 神奈川大学「辛亥革命」シンポジウム
その影には、海外の華僑の支えがあった。
- ▶ A New Asia Seen from Japan-India Dialogue
(国際文化会館)

今後の全体的な課題

- ▶ それぞれの歴史的人物の思想を共有し、歴史的革命を成し遂げることができた要因をさらに深く掘り下げる。
- ▶ 歴史的人物は、「光」の部分もしくは「影」の部分が印象に残りやすいが、別の捉え方・考え方を模索する。
- ▶ 日本・中国・韓国3カ国の歴史的人物たちが、人的ネットワークを構築するまでの「挫折や苦悩」をさらに掘り下げる。
- ▶ 現代に繋がるべく、「挫折や苦悩」から学んだことを現代的に解釈し、取り入れ、今後の国際的な信頼関係構築に生かす。

参考文献

- ▶ 世界を知る力 寺島実郎著 PHP新書
- ▶ 20世紀から何を学ぶか 寺島実郎著 新潮選書
- ▶ パリの周恩来 小倉和夫著 中央公論社
- ▶ 周恩来19歳の東京日記 矢吹 晋著 小学館文庫
- ▶ 毛沢東と周恩来 矢吹 晋著 講談社現代新書
- ▶ 日韓中の交流 吉田光男著 山川出版社
- ▶ 韓国現代史 木村 幹著 中公新書
- ▶ 韓国現代史 文 京朱著 岩波新書
- ▶ 中国歴史・文学人物図典 滝本浩之著 遊子艦
- ▶ 日中関係150年 山中辰雄 東方書店
- ▶ 満州近現代史 現代企画室 現代企画室
- ▶ 孤島見聞 陶菊 隠著 上海人民出版社
- ▶ 戦争の日本近現代史 加藤陽子著 講談社現代新書
- ▶ アジア動向年表2009 アジア経済研究所編 日本貿易振興機構アジア経済研究所研究支援部

参考文献2

- ▶ 伊藤博文と韓国併合
 - ▶ 周恩来秘録
 - ▶ 毛沢東の私生活
 - ▶ 孫文武装蜂起
 - ▶ 孫文辛亥への道
 - ▶ 孫文-100年先を見た男
 - ▶ 宋姉妹
 - 中国を支配した華麗なる一族
 - 孫文と袁世凱
 - 中華統合の夢
 - 革命家 北一輝
 - 藤野先生と魯迅
出版社
 - 石原莞爾その虚飾
 - 孫文を支えた日本人
 - 田中角栄研究-全記録
- 海野福寿著 青木書店
 - 高文 謙著 文藝春秋
 - 李 志綏著 文春文庫
 - 陳 舜臣著 中公新書
 - 陳 舜臣著 中公新書
 - 田所竹彦著 新人物文庫

 - 伊藤 純・伊藤 真 著 角川文庫
 - 横山 宏章著 岩波書店

 - 豊田 穰著 講談社文庫
 - 藤野先生と魯迅刊行委員会 東北大学

 - 佐高 信著 講談社文庫
 - 保坂 正康 ちくま文庫
 - 立花 隆著 講談社文庫